

「障がい理解・共生社会に関する啓発活動」ワーキング詳細要約

(ワーキングの目的)

「障がい・共生社会理解に関する啓発活動」について、子ども向けの周知活動を一つのアイデアとして、取り組みの方向性を検討するためのワーキングを実施。

【開催日時】

令和7年10月23日（木）10時～

【参加者】（敬称略）

障害者就業・生活支援センターWEL'S TOKYO 施設長 橋本氏（はたらく部会長）、

花畠共同作業所施設長 吉田氏、希望の苑施設長 堀田氏、

医療法人社団成仁病院地域連携室室長 小杉氏（相談支援部会長）、

成年後見センターあだち 平氏（権利擁護部会長）、

中央本町地域・保健総合支援課精神保健 田中・昌子

障がい福祉課障がい施策推進担当 佐々木・荒井・飛田、

障がい援護課基幹相談・権利擁護係 和田・村滝・中澤

（※ 精神障がい者自立支援センターセンター長 森澤氏（精神医療部会長）からは別日程にてヒアリング）

1 方向性の確認

（1）PRの目標とキーワード

- ① 自然な共生の理解：共生社会が自然に理解できること。
- ② 分かりやすい発信：特に障がいとの接点が少ない子どもや企業にも分かりやすいこと。
- ③ 親しみやすさ。
- ④ 自分ごとにする。

（2）全国的な動向と課題認識

ア 国レベル

昨年末に、障がい者に対する偏見や差別のない共生社会に向けた国の行動計画が示されており、関心が高まっている。

イ PRスタイルの比較

“ヘルプマーク”と“あいサポート運動”

東京都は“ヘルプマーク”（＝障がいのある方が身につけ、周囲に気づきと声かけを促す）を推進。鳥取県が始めた“あいサポート運動”（＝研修を受けた支援者がバッジをつけ、手助けができるなどをアピールする）は、西日本を中心に協定を結ぶ自治体が増えている。ヘルプマークの普及とあいサポートのような支援側の協力がうまく連動できれば、より良い発信と受け入れができるのではないか。

ウ コンテンツの地域ならではの活用

障がい理解に関する動画や研修コンテンツは世の中に豊富に出回っているが、それらを地域ならではの活動に落とし込むことで、真に理解を深め、「共に生きる」ことにつなげられるのではないか。

2 足立区の現在の取り組み

別紙

3 具体的なアイデアの共有

（1）はたらく部会 リーフレットの作成（予定・計画）

企業5,000社に対し、作成したリーフレットとセミナーの案内をDMで郵送する予定。リーフレットは複雑な雇用情報を分かりやすくするため、文字数を減らし、好事例をQRコードで掲載。「人材不足の解消は障がい者雇用で解決する」というプラスの側面に焦点を当てる。

（2）子ども・区民向け啓発 の“「自分ごと」化と体験”（案、アイデア）

ア 子ども向けコンテンツ

「こころの電池と自分にいいね」。地域や授業での取り上げられる“ともにいきる”のジュニア（小学生～中学生）版のワーキングのコンテンツを作成。障がい理解を「ちがい=こわい」ではなく「ちがい=たいせつ」と感じられるように、自分を大切にするという視点からアプローチする。

イ 地域活動の活用

地域交流展示会でのアンケートで「車椅子体験」など初歩的な実体験への希望が多く、来年度の実施を検討。実体験は印象に残りやすい手法。

ウ 心理検査の活用

心理検査の手法を自己理解と他者理解を促すツールとして活用する。

4 共通する課題と効果的な連携と配信のアイデアについて意見交換

(1) 共通の課題認識

ア 温度感のずれ

一生懸命発信しても、受け取る側にとって情報発信の優先度が低く、読まれずに終わってしまう「温度感のずれ」が最大の課題。

イ 職員目線の限界

SNSや研修講師の派遣を区の職員が行っているため、「職員目線」に偏りがち。当事者の「生の声（思いや困りごと）」が伝わりにくい状況がある。

ウ 親の理解の壁

子どもが学校等で理解を深めても、親の態度により「うちには関係ない」となり、理解が家庭内で浸透しない。

(2) 効果的な連携と発信のアイデア

ア 統一テーマと地域連携

各事業所がバラバラに行っている活動（イベント、SNS発信）を、キャンペーンテーマなどで統一し、情報共有と一括発信を行うことが、情報へのアクセス回数を増やす等良い働きかけになるのではないか。

イ 当事者・事業所との協力によるPR

職員目線ではない事例を事業所と協力して収集し、PRコンテンツとして発信すべき。職員だけで内容を決めず、当事者、現場の声を含めて一緒に作ることで、伝わりやすい内容になる。

ウ 地域密着型ツールの活用

(ア) 町会・自治会掲示板

ヘルプマークや発災時の対応に関するポスターなど、目につきやすい情報を探し、高齢者層や散歩中の地域住民へアプローチする。

(イ) 駅前/区役所前のテレビ（ビュー坊テレビ）

携帯やSNSを使わない層へのツールとして活用すべき。

(ウ) 図書館等立ち寄る場所や読み聞かせ活動等との連動

障がい者週間に合わせて、他者理解に関する書籍を特設コーナーに並べるなど、図書館の企画と連携。読み聞かせ会などの既存プログラムとも連携し、子どものいる家族層への浸透を狙う。